

有家町埋蔵文化財調査報告書第3集

にし おん つか
西鬼塚支石墓・石棺群

1997年

長崎県有家町教育委員会

有家町埋蔵文化財調査報告書第3集

にし おん つか

西鬼塚支石墓・石棺群



1997

長崎県有家町教育委員会

発刊にあたって

西鬼塚文石墓・石棺群遺跡は、有家町蒲河1820番地（西鬼塚）の畠地の中にあり、雲仙岳南麓・標高約60mの依石泥流扇状地の中腹に位置し、南面は有明海に臨み比較的海にも近く西は蒲河川が流れ、生活環境としては最適の所であります。

この遺跡の発掘調査は、昭和49年、平成4年および平成6年の三回にわたって行われておりますが、縄文晩期のものと推定される支石墓や箱式石棺墓や土器・壺・甕などの破片が出土し、原山ドルメン（北有馬町）・山の守遺跡（深江町）と同時代のものと確認されております。発掘調査完了後、遺跡の保存・管理・学習面を考慮して、総合運動公園（有家町小川975番地）内の一角に移築復元して丁重に保存しております。

平成7年7月

有家町文化財保護審議委員会

委員長 篠原徳之

例　　言

一. 本書は、平成6年10月25日～11月2日（2次調査、調査面積168m²）、平成7年6月26日～7月14日（3次調査、調査面積151m²）の2年度にわたって実施した。
有家町蒲河名に所在する西鬼塚支石墓・石棺墓群の範囲確認調査の結果報告書である。

二. 調査は、有家町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁文化課が担当した。

三. 調査関係者は以下のとおりである。

調査指導	西谷　正　九州大学教授
	正林　謙　長崎県考古学会々長
有家町教育委員会	徳永　周助　教育長
	石橋　忠利　教育次長
	野田　文博　社会教育係長
	林　興一郎　社会教育主事
長崎県教育庁文化課	村川　逸朗　文化財保護主事

四. 土器・石器の実測・拓本は松尾美代子、徳永妙子による。遺物の写真撮影は町田利幸による。調査時には苑田正博氏の協力があった。本書の執筆・編集は村川が行った。

五. 出土遺物は、現在のところ長崎県教育庁文化課立山分室で保管している。

本文目次

I 調査にいたる経緯	
II 遺跡の立地と歴史的環境	
III 調 査	
1 調査概要	1
2 土 層	4
3 遺 構	4
4 遺 物	8
IV ま と め	16

挿 図 目 次

第1図 有家町内遺跡地図	2
第2図 調査地点及び周辺地形	3
第3図 T P 1, 3 土層図	4
第4図 調査区配図	5
第5図 支石墓・箱式石棺墓	6
第6図 1号支石墓（上石なし）	8
第7図 2号箱式石棺	9
第8図 3号箱式石棺	10
第9図 4号箱式石棺	11
第10図 5号箱式石棺	12
第11図 T P 3柱穴検出状況	13
第12図 西鬼塚文石墓・石棺群出土土器 1	14
第13図 西鬼塚支石墓・石棺群出土石器 1	15
第14図 石棺法量（長・短）計測図	19

表 目 次

第1表 長崎県の支石墓地名表.....	18
第2表 支石墓石棺形態分類.....	19

図版目次

図版1 支石墓（上石なし）及び石棺検出状況	
図版2 2・3号箱式石棺群等	
図版3 1・4・5号支石墓・石棺墓	
図版4 T P 1・3の土層・柱穴検出等及び笠櫛現の支石墓上石	
図版5 西鬼塚支石墓・石棺墓群出土遺物（土器・石器）	

I 調査にいたる経緯

平成4年5月に、有家町蒲河1,820地の苑田マツエ氏所有の畠地で発掘調査を実施した時に南隣の、1,819番地早田氏所有の畠地で、石棺の棺材の一部を発見し、畠の耕作者より作業の邪魔になるので調査を実施してほしいとの依頼があり発掘調査を実施することとなった。

II 遺跡の立地と歴史的環境

本遺跡が所在する有家町は、島原半島の中心にある雲仙岳東南麓の火山性山麓地上に立地している。標高は60～62mをはかり、遺跡の西側を蒲河川の支流が開析谷を形成している。

周辺の遺跡としては、第2図41の弥生～古墳時代の下鬼塚石棺、绳文時代晚期の砾器を出土した遺跡として21の壹崎遺跡と、22の蒲河遺跡がある。中刻川には中世のセミナリヨ跡があり、桜馬場には30の花丁十字キリシタン墓碑、31の類子キリシタン墓碑等があり、キリシタン時代の伝統も併せもっている。44の法学妙行板碑等の中世の板碑や、中・近世の石塔群等もある。

昭和54年、有家町は町史編纂の為、古川正隆・吉田安弘に委嘱して町内の文化財の分布調査を実施した。その結果、仏教及びキリシタン関係の石造文化財（石人、石仏、板碑、キリシタン墓碑）等が出ていている。

島原半島全体で、本遺跡に先行および並行する遺跡としては、深江町の山の寺掘木遺跡と原山支石墓群があるが、いずれも標高200mを越す高燥域にある。

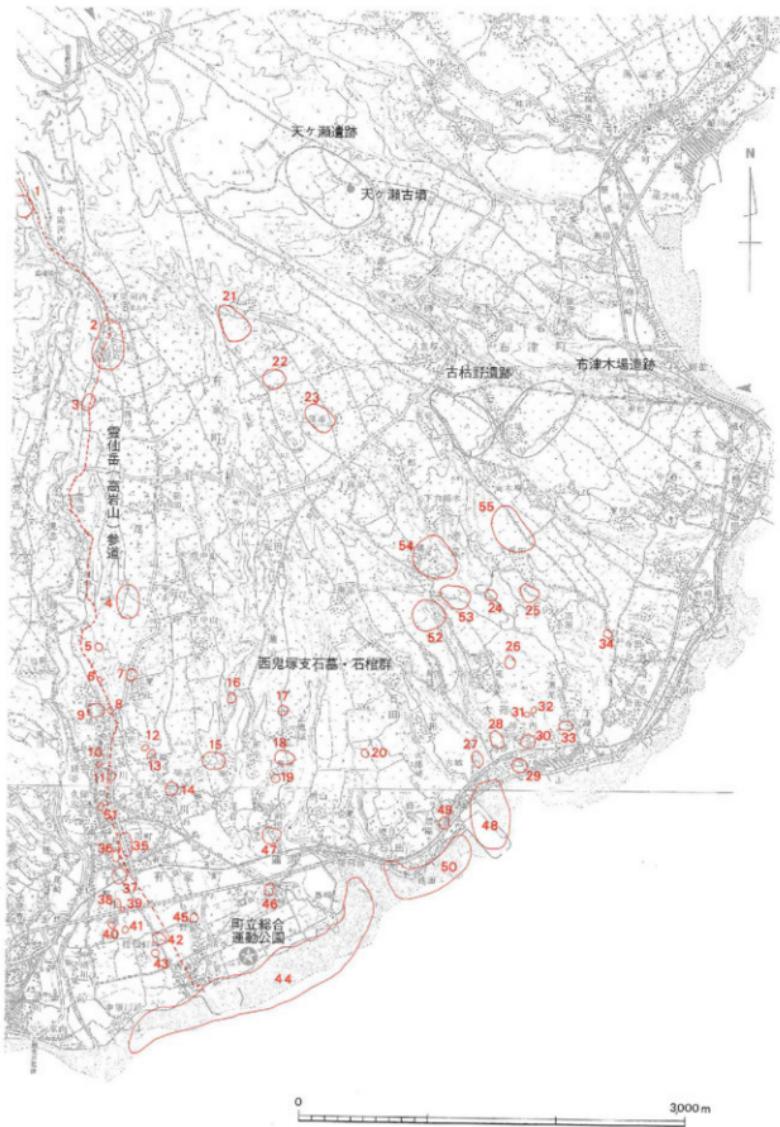
III 調査

1. 調査概要

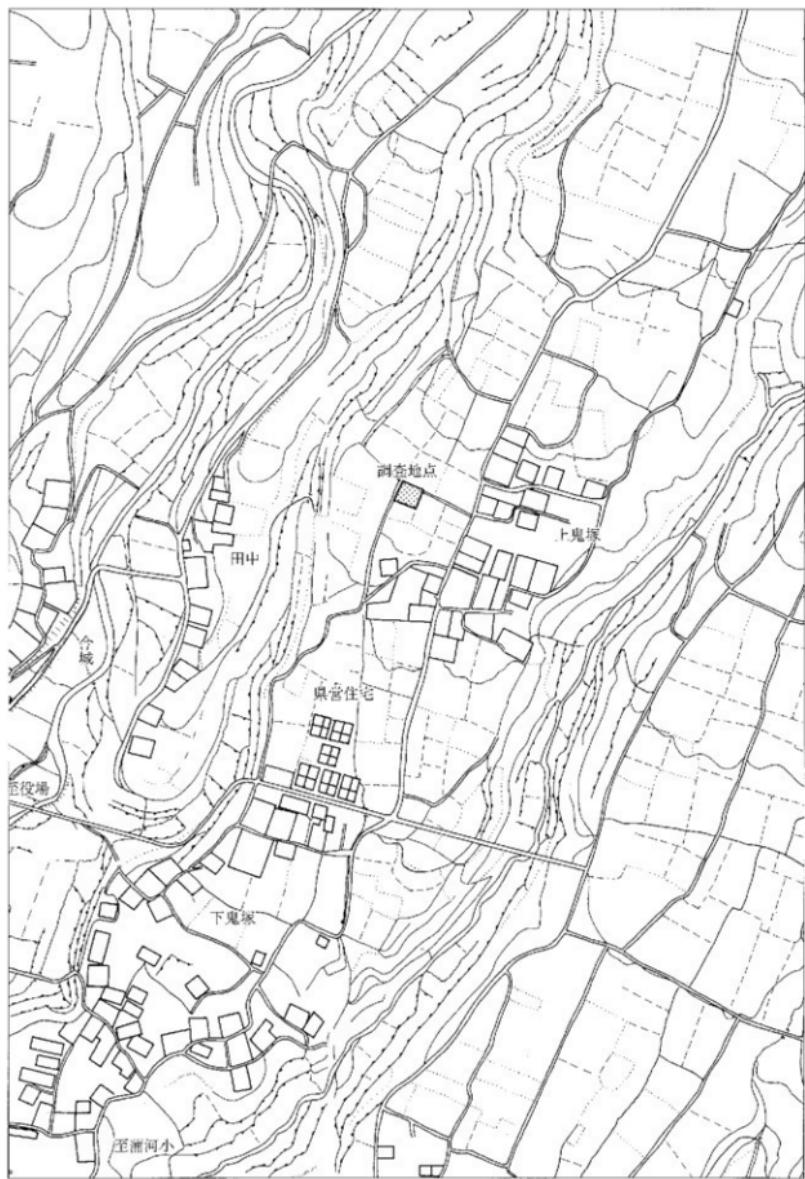
調査対象地である早田氏所有の畠地の、石棺の棺材が露出していた場所に、4m×4mの試掘面を設定し発掘を開始した。まず、表土下20cm程で第1号支石墓の支石を確認した。調査面を広げて確認したところ第2～5号石棺を確認した。第2・3号石棺墓は蓋石が残存していた。第4号石棺の蓋石は破碎が激しいものの半分は残存している。第5号石棺の蓋石は残っていなかったが、調査中に当該の畠の耕作者から、耕作中に耕耘機の爪にかかり、家に保管してといって届けられその大きさから第5号石棺の蓋石と推察された。これらの第2～5号の石棺の周りには支石はなかったが、それぞれ1個ないしは2個の人頭大の石がすぐ近くに置かれており、墓標的な性格をもつものかもしれない。

支石墓1基と石棺4基を確認し、これら以外にも支石墓等が存在しないかをみるために、試錐棒（ボーリングステッキ）で反応をみたが、当たりがなかったので、周囲の状況をみるためにTP1～4を設定した。

TP4では、包含層である第2層の黄褐色土層を掘り下げて土器片、安山岩製スクレーパー、炭化



第1図 有明町内遺跡地図



第2図 調査地点及び周辺地形

物等が出土した。遺構としては、TP 4 中央部で柱穴を 3 個検出した。3 個のうちの 1 個から十字形石器が出土した。

なお、柱穴検出面から 2 ~ 3 cm 程浮いた炭化物を年代測定したところ、BC 1,500 年前の古墳時代の債がており、土器片は縄文時代晚期のものがあるので、この黄褐色土層は単一の文化層とはいえない。この 3 個の柱穴と支石墓・石棺との関係にしても言及を避けたい。

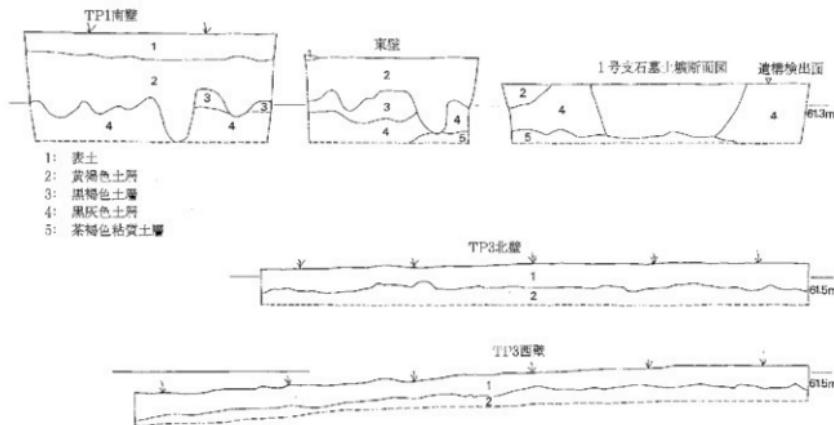
2. 土 層

TP 1 ~ 4 の土層図は以下のようになる。

(TP 1)

- 第 1 層………表土層
- 第 2 層………黄褐色土層
- 第 3 層………黒褐色土層
- 第 4 層………黒灰色土層
- 第 5 層………茶褐色粘質土層

なお、TP 4 の場合は第 2 層までしか掘り下げていない。



第 3 図 TP 1 ~ 3 土層図

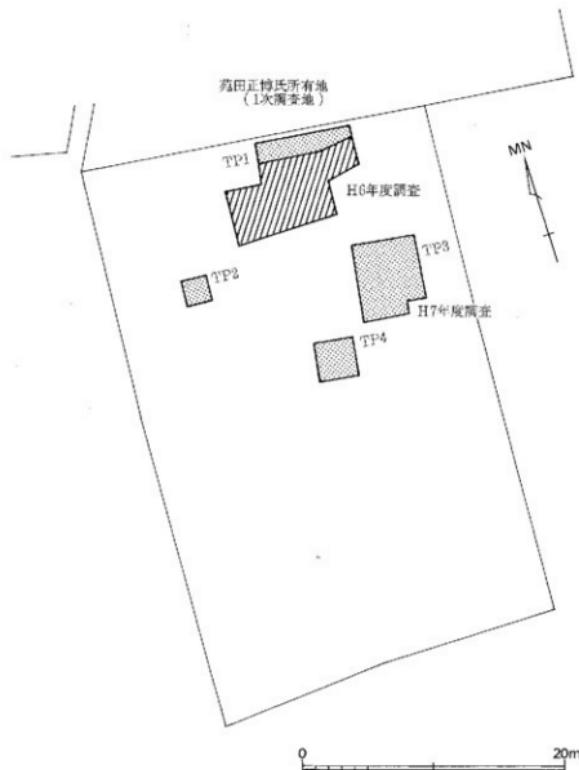
3. 遺 構

遺構検出状況としては、支石墓 1 基と箱式石棺 4 基は、5 m × 7 m の範囲にまとまっており同一のグループを形成するものと判断される。1 号支石墓は蓋石がなく、4 個の支石しか残っていなかった。2 ~ 5 号箱式石棺のうち、2・3 号箱式石棺は蓋石が残存しており、4 号箱式石棺は、約半分残存。

5号箱式石棺は残っていなかったが、調査中に届けられた蓋石の大きさが、ピッタリと石棺の大きさに合ったため、この石棺のものと推定された。1号支石墓、2～5号箱式石棺のいずれ土廣墓・石棺の中からは人骨は発見されず、それらの内外からの副葬品等の出土は、1号支石墓の墓廣中から晩期の粗製土器片が出土したくらいで、2～5号箱式石棺からはなかったが、5号石棺の近くの石のそばから朱塗りの蓋が出土し、3号石棺の近くの石の北側からも蓋が出土した。

なお、蓋石が残存しており、もし、これらの石棺が、支石墓の下部構造だとすると支石が残存していてもよいはずであるが、支石らしきものは検出されなかった。それぞれの石棺から50cm程離れた場所に、1ないし2個人頭大の石が置かれており、墓標的な性格をもつものかもしれない。

石棺の構築の仕方としては、

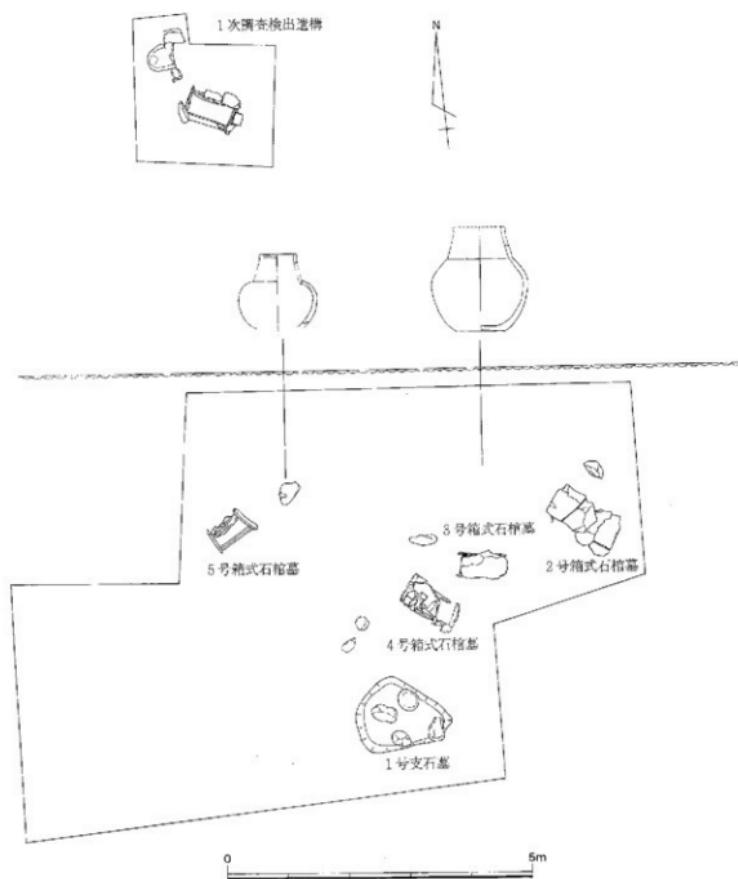


第4図 調査区配置図

①墓廣を掘る。②大きい方の小口材を設置する。③1枚材の側壁を設置する。④棺床材を底におく。⑤残った方の小口材を設置する。⑥2枚ないし3枚の側壁材を使って残った側壁を設置する。⑦蓋石をかぶせる。⑧墓標となる石を石棺の近くに置く。

なお、⑦と⑧の間に、石棺に蓋をしたあと土をかぶせ、盛土をしていたことも考えられる。以上のよう構築の仕方から、棺床材の大きさで石棺のそれが決まってしまうことになる。

最初に発見したのは、1号支石墓の支石4個であったが、周りの石棺を確認したあと、支石の下にあ



第5図 支石墓・箱式石棺群配置図

る土廣を確認し、それと認識するにいたった。土廣の中から粗製土器片が出土した。上石はのこっていなくて、土壤基の主軸はN66°Wである。

(1号支石墓上塙の法量)

長さ：154cm

幅：128cm

深さ：52cm

2号箱式石棺は、今次調査区の北東部で確認した。4基の石棺の中では一番大きい。元々は3枚の蓋石であったと思われるが、2枚がそれぞれ割れて、5片に分かれている。石棺の50cm程東側に長さ40cm程の石が置かれている。主軸はN46°W

(2号箱式石棺の法量)

長さ：86cm（最短）～89cm（最长）

幅：34cm（最小幅）～37cm（最大幅）

深さ：25cm（最小深）～35cm（最大深）

3号箱式石棺は、2号箱式石棺の南西部に位置する。小振りの石棺で蓋石は1枚である。主軸はN77°W

(3号箱式石棺の法量)

長さ：60cm（最短）～68cm（最长）

幅：30cm（最小幅）～33cm（最大幅）

深さ：31cm

4号箱式石棺は、3号箱式石棺の南西部に位置する。蓋石は6割ほどが残存している。主軸はN52°W

(4号箱式石棺の法量)

長さ：65cm

幅：25cm

深さ：29cm（最小深）～33cm（最大深）

5号箱式石棺は、4号箱式石棺の北西部にやや離れて位置する。蓋石は発掘時にはなかったが、この畑の耕作者が家に保管しており大きさからこの石棺のものと判断された。石棺の北東部の石の近くから朱塗りの壺が出土した。主軸はN52°W

(5号箱式石棺の法量)

長さ：60cm（最短）～66cm（最长）

幅：27cm（最小幅）～34cm（最大幅）

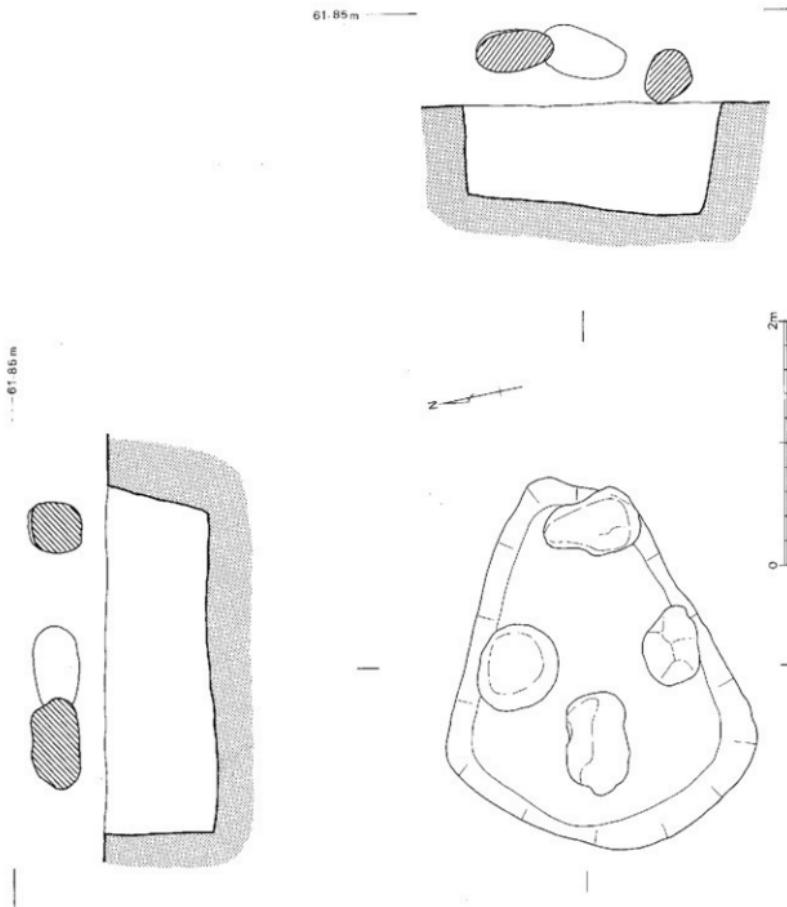
深さ：20cm

T P 4中央部で柱穴を3個検出した。3個のうちの1個から十字形石器が出土した。他に2個の小ピットも検出し、竪穴住居の可能性も考えられたことから周りを広げてみたが、竪穴住居の掘り込み等は確認できなかった。

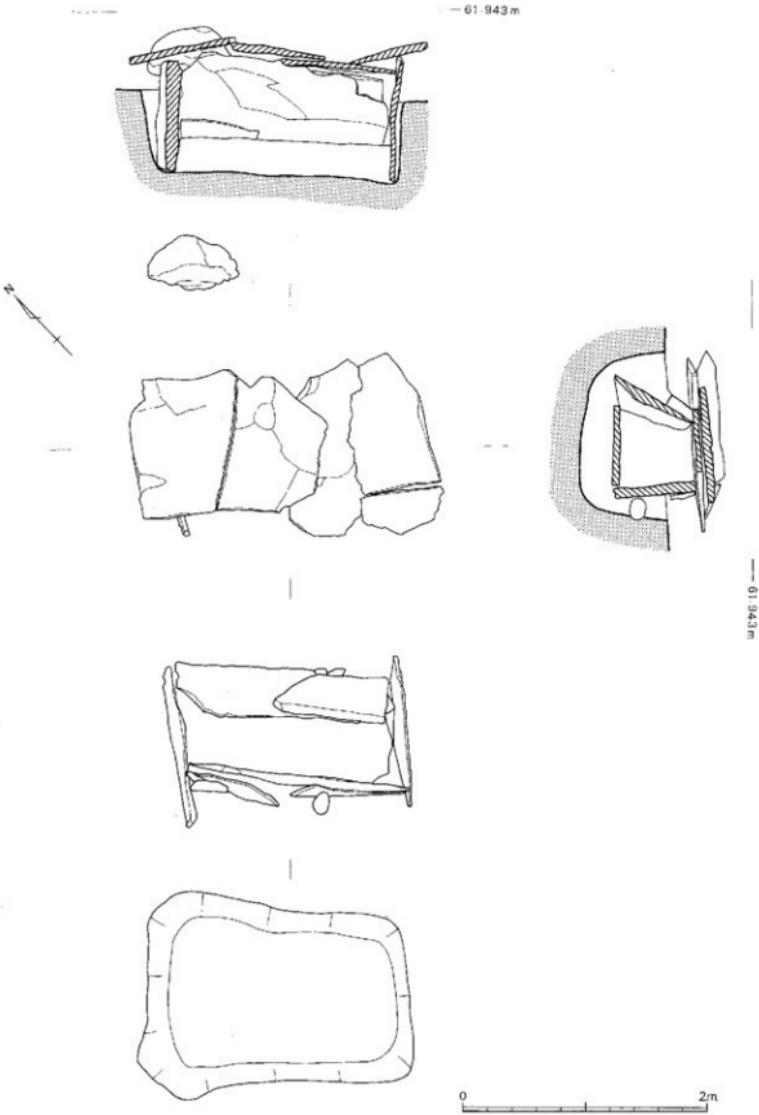
4. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器が97点、石器19点、陶磁器9点であるが、今回の調査区のすぐ北側の畠の境界である石垣部分から、石垣を築くときに出土したといつて苑田正博氏採集の土器14点、石器1点を含めると、総数140点の出土遺物があった。

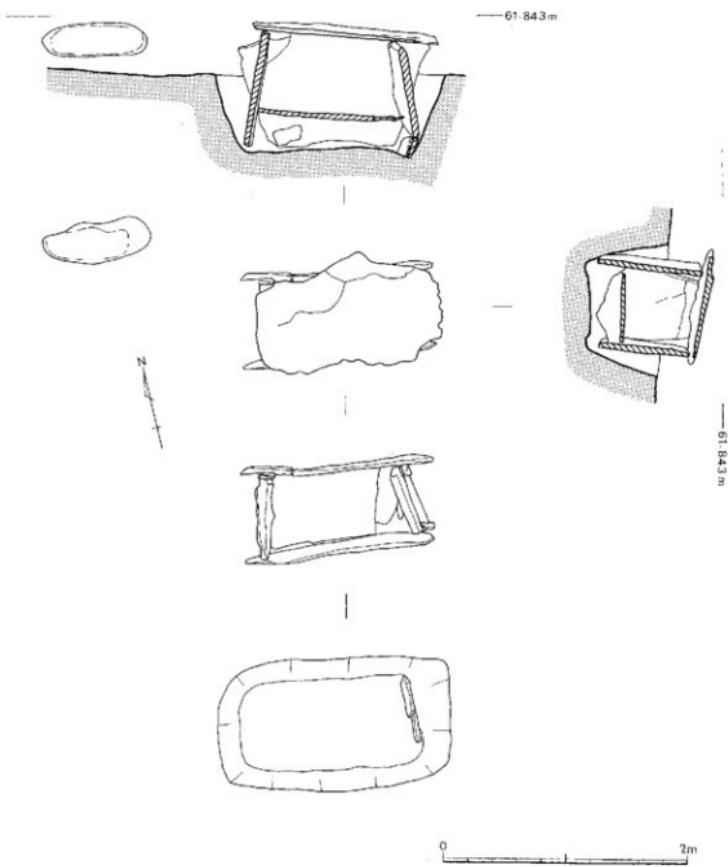
土器には、原山期の刻目凸帯文の壺、同時期のものと思われる朱塗りの壺、粗製土器等がある。石



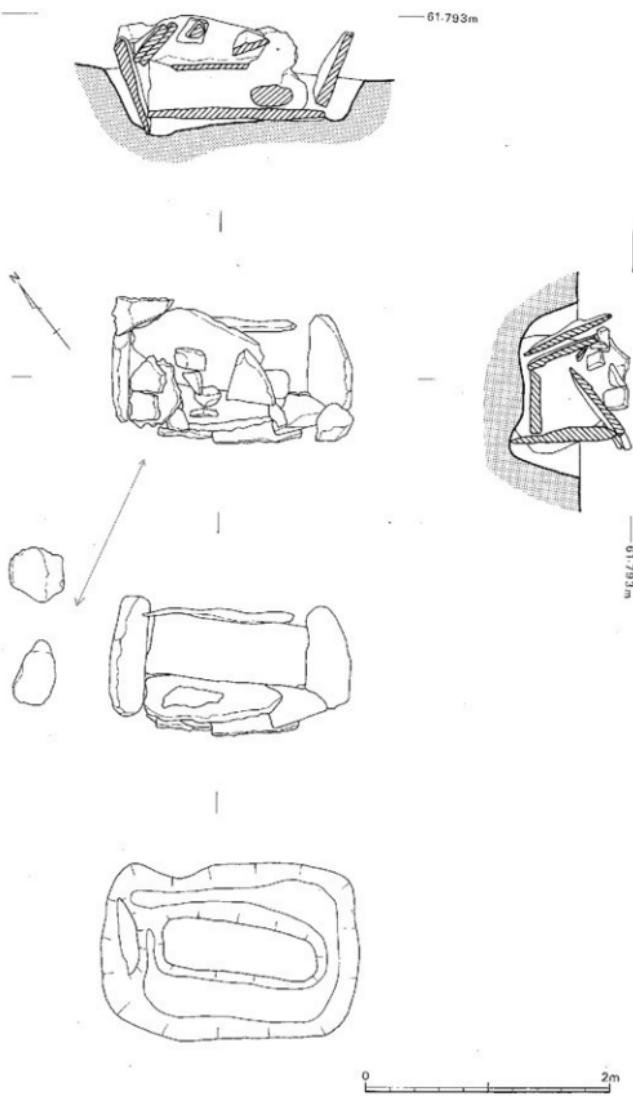
第6図 I号支石墓（上石なし）



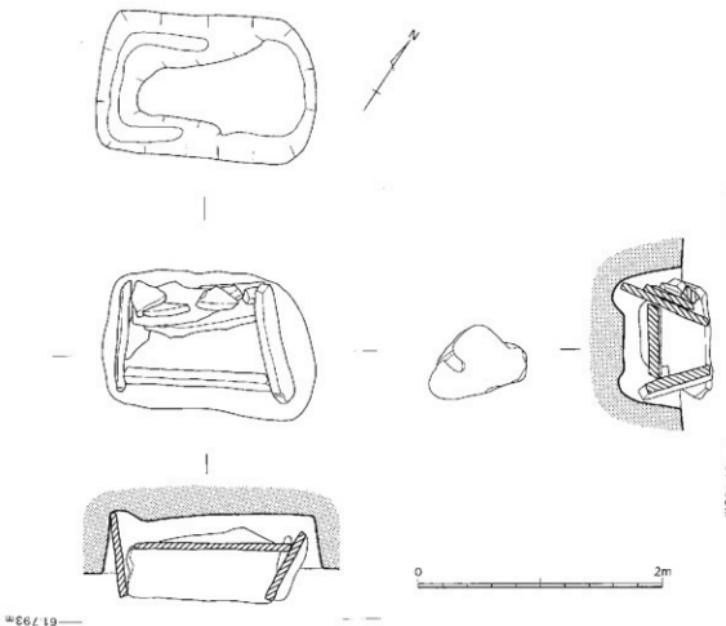
第7図 2号箱式石棺 1/40



第8図 3号箱式石棺 1/40



第9図 4号箱式石棺 1/40



第10図 5号箱式石棺 I / 40

器では、石鉋、スクレーバー、十字形石器、砥石、石錐等がある。

① 土 器

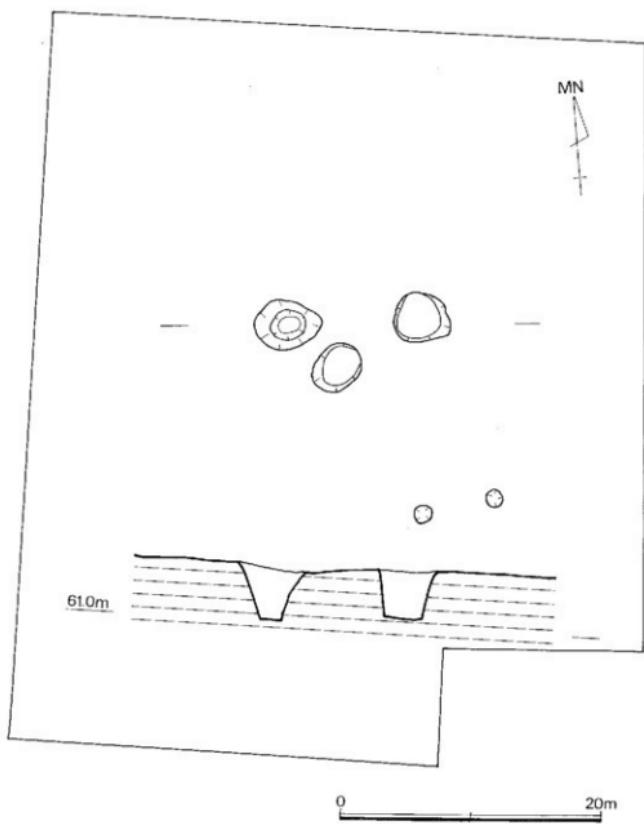
1は、5号石棺北東部の石の周辺から出土した小形壺である。胴部から頸部にかけての屈曲部の輪積痕跡で剥がれています。口縁部と胴部は接合はしないが、同一場所で出土し、同じく朱塗りであることから、おそらく同一個体であろう。胴は大きく外へ張り出します。外壁はヘラにより研磨調整されています。朱は口縁端部内側まで施されている。胎土に砂粒を若干含む。

2は、3号石棺北端から出土した壺である。口縁部は欠失している。胴部の張りは強くない。外面は黒褐色、内面は黄灰色。胎土に砂粒を含む。

3～5は、調査区北側、畑の境界で石垣築造時に出土し、宍田正博氏によって採集された土器である。

3は、刻目凸帯文土器の口縁部である。刻目施文はヘラ状のもので、右面からのみ切り込みをいれている。内外面ともナデ仕上げしている。外面は黒、内面は淡黄灰色。胎土に砂粒、黒雲母等を含む。

4、5とも屈曲部の張り出しに刻目をもつが、4は右からの力が強く、5は左右両方から切り込みをいれている。

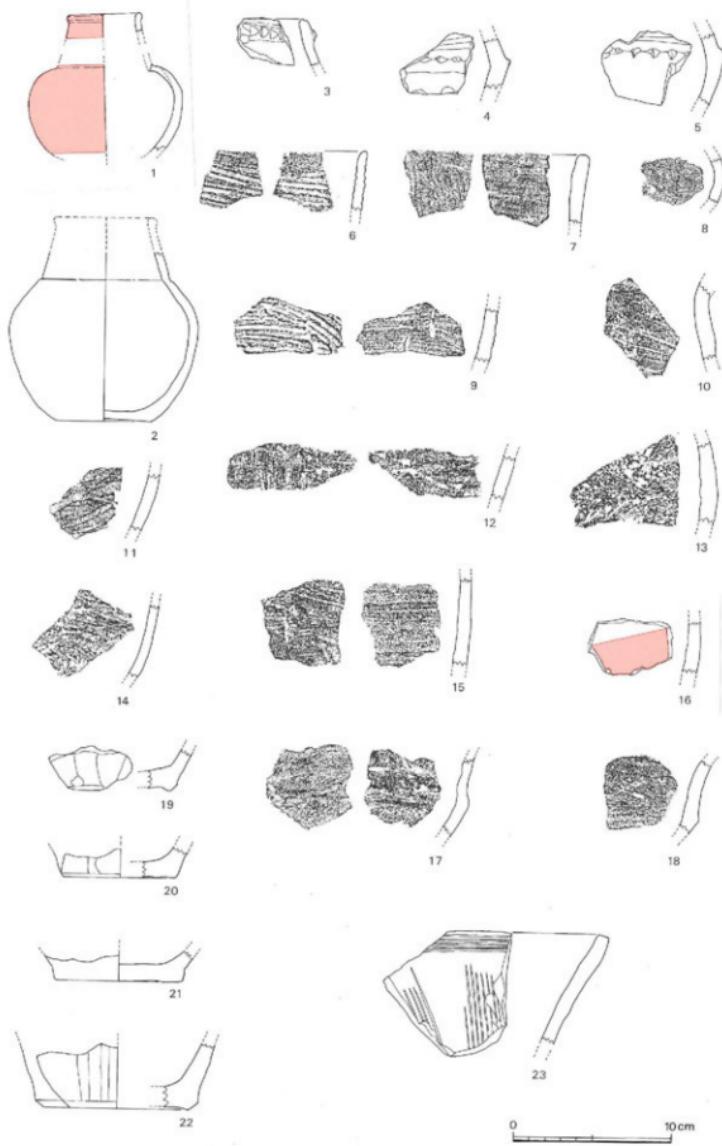


第II図 T P 3 柱穴検出状況

内外面は条痕が施されているが、外面にはその上からナデ仕上げしている。3、4とも外面は灰赤褐色、内面は暗灰黄色、胎土に若干の砂粒、黒雲母を含む。

6は、外面に条痕をも粗製土器である。黒雲母、砂粒を含む。暗黄灰色。TP 4, 2層出土。7は、粗製土器の口縁部である。外面は縦方向の、内面は横方向のヘラ磨きしている。若干の砂粒、黒雲母を含む。色調は明黄橙色。TP 3, 2層出土。

8は、壺の胴部片と思われる。砂粒を含む。色調は外面は黒褐色。TP 3, 2層出土。9は、内外面に条痕を残す粗製土器である。微細砂粒を若干含む。TP 4, 2層出土。10は、調査区北側、畑の境界で石垣築造時に出土し苑田正博氏よって採集された粗製土器のなかの1片である。砂粒、黒雲



第12図 西鬼塚支石墓・石棺群出土土器 I / 3

母等を含む。13から16も同じ場所からの出土。

11は、胎土に黒雲母、砂粒を含み、外面にヘラなで調整を施す粗製土器。色調は淡黄橙色。

12は、胎土に黒雲母、砂粒を含み、内面にナデ調整を施す粗製土器。色調は暗黄橙色。1号支石墓土壙内からの出土である。

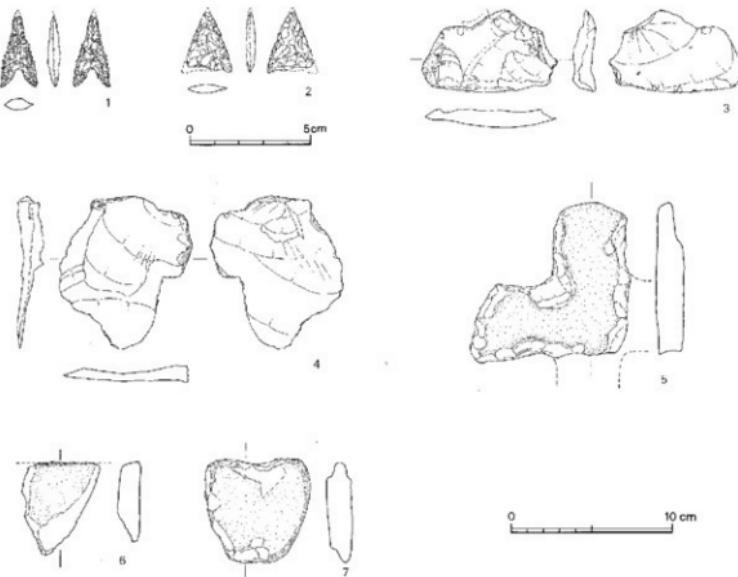
13は、胎土に黒雲母、砂粒を含む粗製土器。色調は暗黄橙色。

14は、胎土に黒雲母、砂粒を含み、外面は条痕、内面にナデ調整を施す粗製土器。色調は暗黄橙色。TP 3, 2層からの出土。

15は、胎土に黒雲母、砂粒を含み、内外面にナデ調整を施す。色調は黄橙色。

16は、朱塗り土器片である。砂粒を含む。内面の色調は明黄橙色。

17, 18は、屈曲部の一部分である。胎土に黒雲母、砂粒を含み、内外面にナデ調整を施す。17は、TP 3, 3層出土。色調は外面は暗黄橙色、内面は暗灰色。18は、TP 4, 2層出土。内面は黃灰色、外表面は暗灰色。19~22は、土器の底部片である。22は、外面にヘラ磨きの跡が残っている。4点ともTP 3, 2層の出土である。色調は19~21が淡黄灰色。22が明黄橙色。23は、瓦質のこね鉢片である。TP 4, 2層出土。色調は黄灰色。



第13図 西鬼冢支石墓・石棺群出土石器 I / 3

② 石 器

1は、チャート製の鋸歯鎌である。先端部欠。TP 3, 2層出土。2は、安山岩製の石鎌である。TP 1出土。3, 4は安山岩製のスクレーバーである。3は、内湾するスクレーバーエッヂを持っている。4は、スクレーバーエッヂの明確なものは認められない。5は、十字形石器である。2方がおれていますが、右方のものは折れたところ再調整加工を施している。砂岩製。TP 4 ピット内からの出土である。6は、砂岩製の砥石。TP 1の出土。7も砂岩製の石鎌である。TP 1の出土。

IV ま と め

本調査の意義としては、県内で12番目の支石墓として、その知見を増すとともに、これまで島原半島の縄文時代晩期の支石墓が、北有馬町の原山支石墓群しか知られておらず、その標高も250mほどの高い所にしかその存在が知られていなかったのに対して、比較的低い場所（標高61～62m）で発見されたということだろう。

また、今回の調査では、支石墓（下部構造は土壙族）と石棺の混在を確認できたことも、もう一つの成果であろう。これらの支石墓、石棺の近くには1個ないし2個の石が置いてある。算術的な意味をもつものかもしれない。

石棺の構造は、小口材を側壁の外に出すものは2, 4, 5号箱式石棺、片方の小口材は両側壁の中にいれ、もう片方は片側だけを側壁の外に出すものとして3号箱式石棺がある。法量としては長さが60～89cm、幅が25～37cm、深さは20～35cmを測り、石棺としては小形の部類に入る。

第14図の石棺法量計測図をみてもわかるように、法量的には大野台遺跡C地点に近い。大野台遺跡E地点の場合は、長さで90cmを越えるものが多く1.0mを越えるものもあり、幅でも40cmをこすものが大半で、50cmを越えるものも多い。全体的には大野台遺跡E地点の場合は、比較的大きい。

出土遺物をみてみると、大野台遺跡C地点の箱式石棺のまわりからは、縄文時代晩期終末の夜白式土器が出土しているが、大野台遺跡E地点の場合は、弥生時代前期の土器等が出ている。C地点とE地点では時期差が考えられる。西鬼塚支石墓・石棺群の場合には、大野台遺跡C地点の箱式石棺の法量に近い。土器からみた出土遺物の所属時期も近い。

TP 4では、柱穴を3個検出し、3個のうちの1個から十字形石器が出土したが、十字形石器の出土は現在のところ縄文時代晩期前半代までしか知られていないので、縄文時代晩期後半の支石墓・石棺群とは別の時期のものであろう。

なお、1号支石墓は、上石が無くなっていたが、本遺跡の東側70m程の集落内に「笠懸現様」として祀られている比較的大きな笠石（長さ1.2m、幅0.7m、厚さ0.5m）が、遺跡から運ばれたとの地元の方の話があり、これが1号支石墓の上石であった可能性がある。検出された遺構は現在、町立総合運動公園内に移築復元されている。

〈引用文献〉

- 古田正隆 「有家町内における文化財の分布調査」—資料よりみた倭、韓交流史に対する提言の試み
—有家町の文化財報告 第1集 昭和55年3月31日 有家町教育委員会
- 正林 譲 「大野台遺跡」—重要遺跡範囲確認調査報告— 鹿町町文化財調査報告書 第1集 1983集
長崎県鹿町町教育委員会

長崎県の支石墓



第1表 長崎県の支石墓地名表 (安達勉『長崎県の闇文期の支石墓と石器』長崎県考古学会資料より)

遺跡名	所在地	時期	備考
1 宇久船原遺跡	北松浦郡宇久町平野	縄文後期～弥生	条彌文土器、板付I、II、城ノ越
2 田 路 渡 墓	平戸市大久保町	?	平石5基、下部構造石棺？未調査
3 桑田原遺跡	北松浦郡平野町	縄文後期～弥生	夷帶文土器、板付II、城ノ越 他
4 入野台遺跡	北松浦郡佐世町	縄文後期～弥生後期	突彌文土器、板付II他、片刃石斧、石包丁他、大麻
5 小山内支石墓	北松浦郡佐世町	縄文後期土器	土器網羅、下部壺造形式石棺墓
6 篠山支石墓	北松浦郡佐々町篠山	縄文後期	體筒型人形突彌文土器、? 磨砂器
7 四 及 田 遺 跡	佐世保市下本山町	縄文後期～弥生中期	突彌文土器、板付I、II、抜入石斧、石包丁他
8 天 久 保 遺 跡	西彼杵郡西海町天久保	縄文後期～弥生中期	突彌文土器、圓文土器、泡、通称あり、5基以上
9 鳴 規 后 支 石 墓	諫早市中馬郷字千代	弥生前期・後期？	板付II、縄付II製山斧、40基以上？
10 井 瀬 支 石 墓	北高来郡小長井町井瀬	弥生前期	板付II、支石墓2基？
11 畜 溝 型 支 石 墓	島原市二城町畜溝	弥生中期	網手、鉄角形削劍、玉器、寶船
12 古 先 手 家 支 石 墓	南高来郡有家西鬼家	縄文後期	突彌文土器、上石無し、下部は土壙墓
13 岩 山 遺 跡	南高来郡北石馬町原山	縄文後期	原山式土器、1～3群60基以上現存

集形	形 状	西鬼塚石棺群	大野台遺跡C地点	同 E地点	原山第3支石墓群	小川内支石墓群
I	□	2.4.5	2.5.6	3.5.10.11.16.17, 19.28.32.34	104.101.43.40.37, 29.20.57	5.7
II	a b	□	1	20	9.6	3
III	a b	□		7	30	
IV	a b	□	3.4.7		417.31.24.25.21, 19	2.6
		□	3		39	
V	a b	○		4.31	106	
		□		24.25		

第2表 支石墓石棺形態分類

(注) 大野台遺跡E地点については、蓋石が失われていて、構造が判明しているもののみについてあげた。

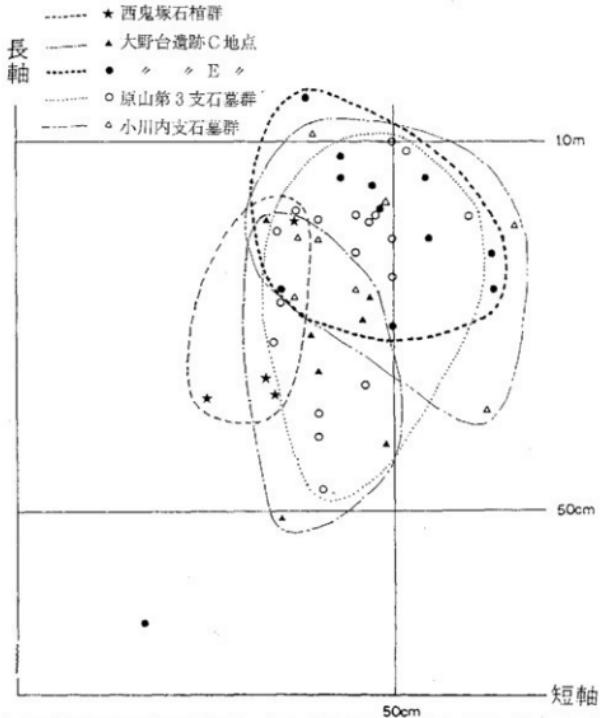
第14図 石棺法量（長・短軸）計測図
正林護「大野台遺跡」より転載

図 版



遺跡遠景（▼印）、西側から撮影



支石墓（上石なし）及び石棺群検出状況

図版 2



支石墓（上石なし）石棺検出状況



調査のようす



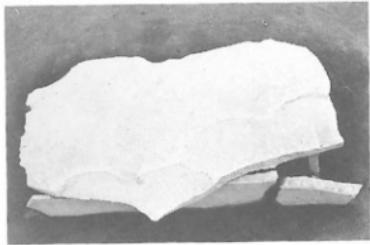
2号箱式石棺



同左、蓋石をとったところ



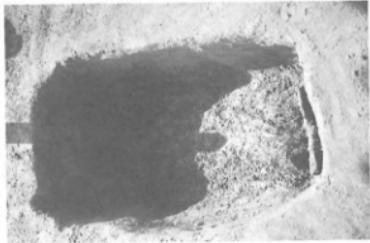
2号箱式石棺の土壤



3号箱式石棺



3号箱式石棺の蓋石をとったところ



同左の土壤



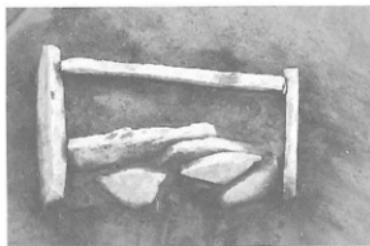
4号箱式石棺



同左, 蓋石をとったところ



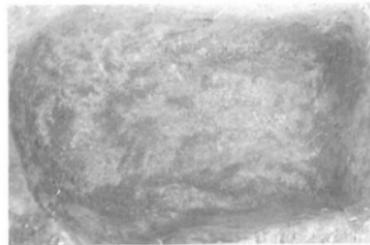
同上, 土 壙



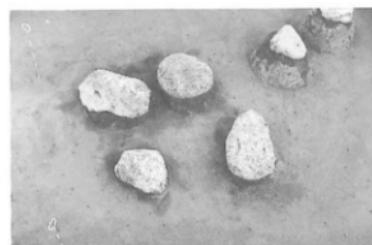
5号箱式石棺



5号箱式石棺内の覆土をあげたところ



同左, 土 壙



1号支石墓 (上石なし)

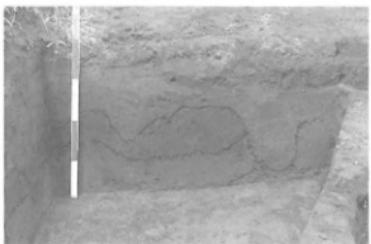


同左, 土壙墓断面のようす

図版 4



TP 1 北側土層



TP 1 南側土層



TP 3 西側土層



TP 3 北側土層



TP 3 柱穴検出状況



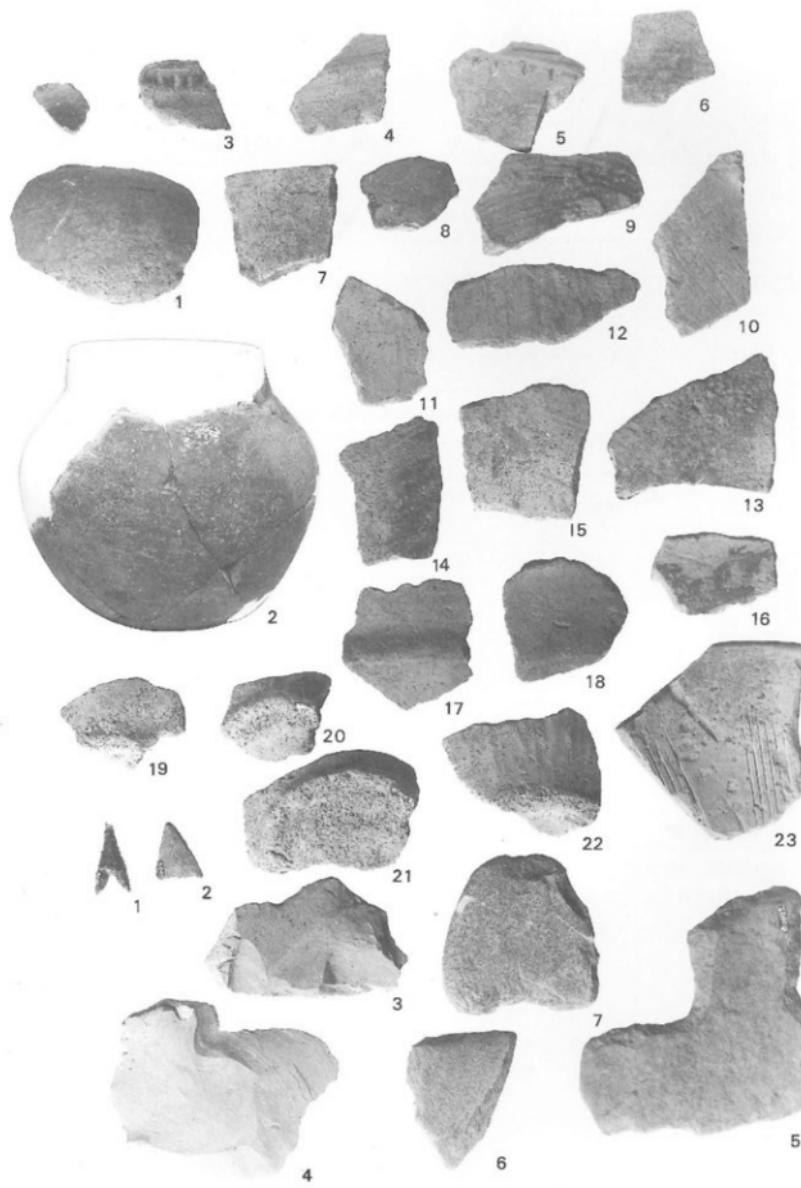
遺物出土状況



遺跡の70m東に祀られている笠檻現様（支石墓上石）
西側より撮影



同左、
南側より
撮影



西鬼塚文石墓・石榴墓群出土遺物（土器・石器）

報告書抄録

ふりがな	にしおんりかしやきほ
書名	西鬼塚文石墓・石棺群
副書名	
巻次	有家町埋蔵文化財調査報告書第3集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	村川逸朗
編集機関	長崎県南高来郡有家町教育委員会
所在地	〒859-22 長崎県南高来郡有家町山川58番地
発行年月日	平成9年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
にしおんりかしやきほ 西鬼塚文石 墓・石棺群	みなかみかわき ぐんあく えちよら 南高米都郡有家町 瀬河名	96-32	32°40'20"	130°19'05"	19941025~ 19941102 19950626~ 19950714	168m ² (2次) 151m ² (3次)	畠地の整 地 リ

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西鬼塚文石 墓・石棺群	墳 墓	縄文時代晚 期	支石墓・箱式石棺	土器 縄文時代晚期刻目 凸壘文土器(壺・ 丹達壺) 石器 石鏃、スクレーパー, ト字形石器、砥石, 石鍤	支石墓と箱式石棺群 の共存の確認。

有家町埋蔵文化財調査報告書第3集

にしおんつか
西鬼塚支石墓・石棺群

1997

発行 長崎県有家町教育委員会
南高米郡有家町

印刷 株式会社 昭和堂印刷

正誤表

ページ・行	誤	正
例言・2	.	.
2・第1回	有明町	有家町
5・2	いずれ	いずれも
〃	廣	廣
13・27	ナデ仕げ	ナデ仕上げ
〃・29	条痕をも	条痕をもつ
18・第1表の1	条變文	条痕文
〃・〃5	小山内	小川内
〃・〃11	島原市三	島原市